

奈文研

ニュース

No.44

Mar.2012

NABUNKEN NEWS



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1
<http://www.nabunken.go.jp/>

ベトナム・カイバー集落調査

2003年、文化庁文化財部とベトナム文化情報省（現文化スポーツ観光省）との間で、伝統的集落および建造物の保存、修復、管理の分野における技術協力に関する協定が結ばれました。この協定のもと、奈良文化財研究所は、文化庁の要請を受け、2003～2005年度にベトナム北部ハタイ省ドゥオンラム村の集落調査をおこないました。調査後、ドゥオンラム村はベトナムの国家文化財に指定されました。2009年には新たな協定が結ばれ、引き続きベトナムの農村保存に関する協力をおこなうこととなり、これまで中部トゥアティエン・フエ省フォックティック村、南部ドンナイ省フーホイ村について調査をおこないました。本年度は、南部ティエンザン省カイバー市の集落調査をおこなっています。

カイバー市は、ホーチミンの南西、車で約2時間のメコンデルタに位置し、メコン川やその支流を利用した水上マーケットで有名な街です。

この地域は、バーホップ川とその支流・水路に面して敷地を構え、かつては少数の大地主が広大な土地に水田を設け、水運を使って作物の流通をおこなっていました。しかし、分家や小作人の定着などで土地は徐々に細分化され、収益効率の問題から稲作からリュウガン、柑橘などの果樹栽培へと移行、

船による運搬からバイクでの運搬へと変化してきました。現在は、短冊状の敷地の前面に住宅を構え、敷地背後に果樹園を設けるスタイルが主流となっています。

調査では、このような集落の構造や景観に関わる調査とあわせ、伝統的な民家建築や大工道具の調査をおこないました。この地域の伝統的な住宅は、入母屋造平入の主屋に、妻入の付属屋をつないで、正面1間に吹き放ちの屋根を連続させる形式が基本とみられます。内部は、古くは丸柱の総柱で、身舎（はりゆき）は虹梁形（こうりょう）の貫（ぬき）で固め、束（つか）を立て、登梁（のぼりばり）を支え、棟木（むなぎ）を受ける構造です。桁行は5間、梁行6間が基本で、身舎背面に装飾パネル（は）を嵌め、登梁に彫刻を施します。正面側は中央に祖先を祀る祭壇を置き、その前面は接客空間として使用し、背面は寝室や物置などに使用しています。台所や浴室などの水回りは、主に付属屋や建物背後の小屋に位置します。このような基本的な構成はどの住宅でもみられる特徴ですが、20世紀後半に建てられた比較的新しい住宅では、小規模の住宅が増えたこともあり、基本様式は踏襲しつつも、各要素の簡素化がみられます。

以上のような伝統的な生活スタイルをもつこの集落も、徐々に近代化が進んでいます。本調査の成果により、より良い保存計画の策定・実行が望まれます。
（都城発掘調査部 大林 潤）



運河と集落の様子



伝統様式の民家